

基礎看護学実習 I におけるコミュニケーションに対する 学生の学びのプロセス

鈴木真由美・下平七重*・岩嶋けさこ**・伊藤洋子

A Process of Learning of the Student for Communication in
Basic Science of Nursing Training I

Mayumi SUZUKI, Nanae SHIMODAIRA*, Kesako IWASHIMA** and Yoko ITOH

要旨：基礎看護学実習 I におけるコミュニケーションに対する学生の「学び」の実態を明らかにした。実習後のテーマ設定のあるレポートより、学生の「学び」を抽出し、カテゴリーを生成し、帰納的に分類した。学生は、コミュニケーションは看護実践に欠かせない能力であること、コミュニケーション能力により、看護行為そのものが決定付けられることを学んでおり、自己課題、自己成長を認めていた。コミュニケーションに「困難」を感じつつも「重要性」を認識し「促進」に向けての手がかりを獲得しつつあるプロセスが明確になった。これらの学生の「学び」を、アーネスティン・ウィーデンバックの理論を援用し、比較検証したところ、コミュニケーションの本質、コミュニケーションの技法、技能および効果的な看護への適用について学んでいた。ウィーデンバックの理論と比較し抽出されなかった学びは、当該実習において学生には困難であったと考えられる内容であった。学生の学びのプロセスは段階的なものであり、看護観の形成の基盤となるものであることが示唆された。

Key words：基礎看護学実習 I (Basic science of nursing I), コミュニケーション (Communication), コミュニケーション能力 (Ability for communication), 学びのプロセス (A process of the learning)

はじめに

平成21年度にスタートした新カリキュラムでは、コミュニケーション能力は看護師に欠かせない能力として教育内容の充実を求めている。この背景には、基礎看護学領域の近年の学生のコミュニケーション能力の低下が指摘されている。今日の医療・看護は、最先端技術の発展とともに、高度化・複雑化が著しい。看護技術の行使には、的確な判断のもとに、正確な技術を提供することが求められている。援助の人間関係を基盤とする看護技術の提供に、コミュニケーション能力は必須である。このような背景から、新カリキュラム

では、今日の医療・看護に対応できる看護職の育成をねらいとしている点はいうまでもない。コミュニケーション能力の育成は看護基礎教育において要となり、基礎看護学領域においてはその基盤づくりが必須となる。

A 短期大学看護学科 (以下「A学」とする) の旧カリキュラムでは、基礎看護学実習 I においては療養環境およびコミュニケーションを主軸とした実習展開であったが、「看護基礎教育の充実に関する検討報告会報告書」¹⁾の趣旨と、コミュニケーション能力の低下を指摘される近年の学生の傾向を踏まえ、新カリキュラムより基礎看護学実習 I (1 学年・前期, 1 単位 6 月) において、コミュニケー

2011年1月24日受付; 2011年4月15日受理

* 前飯田女子短期大学非常勤助手 ** 前飯田女子短期大学助手

ションを主軸とした実習展開の必要性が生じた。したがって、基礎看護学実習 I はコミュニケーションを主軸に展開した。

コミュニケーションを主軸とした当該実習で、学生はコミュニケーションあるいは、コミュニケーション能力をどのようにとらえ、どのような場面から何に関して学んだのか調査する必要があった。よって、基礎看護学実習 I 終了後のテーマ設定のあるレポートから、コミュニケーションに対する学生の学びを帰納的に抽出した。先行研究では、学生の「学び」に関して帰納的方法を用いて分類した先行研究は少なく、2005年里光²⁾らの、M.メイヤロフの視点を用いて、ケアリングの概念とコミュニケーションについて初学者の学びを分析したものに限定された。

本研究では、これらの学生の「学び」をアーネスティン・ウィーデンバックの理論を援用することで、その「学び」のプロセスを明らかにすることを目的とする。コミュニケーションに対する「学び」の実態を明らかにすることを通して、社会のニーズに対応できる看護実践能力を高める教授方略の一助が得られると考える。

研究目的

基礎看護学実習 I (1 年次 6 月) を履修した学生の、実習後のテーマ設定のあるレポートより、コミュニケーションに対する学生の「学び」を明らかにし、その学びのプロセスを概念化する。

研究デザイン

質的帰納的研究

研究方法

1. 対象者；A 学，基礎看護学実習 I を履修した学生 65 名のうち協力の得られた 52 名
2. 研究期間；平成 21 年 6 月から平成 21 年 9 月
3. データ収集方法；基礎看護学実習 I 終了

後に、対象学生全員に向けて、研究の趣旨と倫理的配慮について文書と口頭で説明し、同意書にサインのある学生のレポートのみを研究対象とした。

4. 分析方法；3 名の教員で、テーマ「コミュニケーションについて感じたこと、考えたこと」で記述された学生のレポートから、コミュニケーションに関する学びのある文脈を、単独で意味が読み取れる最小単位で抽出した。この抽出したものを素データとした。素データから共通の意味、内容といった類似性に従いサブカテゴリーを生成し、さらに抽象度を上げていきカテゴリーを生成した。3 名が一同に会することで検討会議成立とみなし分析の手続きを踏んだ。分析の最終確認は、A 学での教育経験 15 年の教員が行い、4 名の教員間でコンセンサスを得た。
5. 本研究の理論の援用；コミュニケーションに対する学生の学びを抽出するにあたり、アーネスティン・ウィーデンバック「コミュニケーション～効果的な看護を展開する鍵」³⁾の理論を援用した。
6. 倫理的配慮；研究の目的および方法について説明し、研究への参加・協力は自由意思によること、参加・協力しないことで成績などへの不利益は生じないことを書面と口頭で説明した。説明後、同意の得られた学生のみを対象とした。調査によって得られたデータの流用はせず、管理には十分留意した。
7. 用語の操作的定義；「学び」= 学生個々の異なる体験をもとに記述されたもの、学生の思考に変化が見られるもの、表現としては、語尾が「学んだ」「考えた」「知った」もしくはこれらの表現に置き換えられるものとした。オリエンテーション内容の羅列、文献の引用、事象のみは「学び」としない。「学び」のプロセス=「学び」の経過した道筋、もしくは「学び」の結果とした。

表2 学生の学びカテゴリー

n = 48 素データ = 118

基礎看護学実習 I の目標

本研究に関する基礎看護学実習 I の目標を表 1 に示した。

結 果

「コミュニケーションについて感じたこと、考えたこと」のテーマで記述された学生のレポートを対象とし、倫理的配慮についての説明により研究に同意の得られた学生は52名、このうち「学び」の記述がない学生は4名であり48名のレポートをデータ収集の対象とした。素データは118データであった。得られたデータから、学生はコミュニケーションあるいは、コミュニケーション能力をどのようにとらえ、どのような場面から何に関して学んだのかを分析した。この時点では、ウィーデンバックの理論に依拠することなく分析した。素データから、抽象度を上げ、11のカテゴリーを生成した。カテゴリーを生成した後ウィーデンバックの理論を援用した(表2, 図1参照)。

*【】はカテゴリー、〔〕はサブカテゴリー、〈〉は素データを表す。

*『』はウィーデンバックの理論の項目、「」はウィーデンバックの理論の内容を表す。

表1 基礎看護学実習 I におけるコミュニケーションに関する目標

目的	対象との人間関係をはかるために、コミュニケーション能力を磨くことの必要性がわかる。
目標	
①	患者が病院でどのような生活を体験しているかを聞くことができる。
②	患者の言葉や態度などから、患者の示す反応に気づくことができる。
③	患者のニーズを理解しようとする姿勢でコミュニケーションをとることができる。
④	患者の言動と自分の認識の「ずれ」に気づいた場合、自分の知覚したこと、考えたこと、感じたことを表現することができる。
⑤	患者との関わりを通し、ありのままの自分自身を見つめることができる。
⑥	対象のプライバシーを守ることができる。
⑦	人間関係の成立をはかるために、コミュニケーション能力を磨くことの必要性がわかる。
編成	学生は1グループ5～6名で構成し12グループに分かれて実習展開をする。

内 容	サブカテゴリー	カテゴリー	
気づくことも大切 気づかなければならない 表情や行動からの異変に気づくこと 変化に気づくことは寄り添った看護をするために大切 表情の変化に気づく	気づく(5)	感性に左右される(3)	
表情やしぐさ、声の様子などを注意深く観察すること 表情を観察すること 相手のことを観察しているとわかってくる 観察することで自然な援助ができる 表情や目の動き、しぐさ	観察する(5)		
表情やしぐさから読み取る 表情を読み取る 言葉や表情、しぐさで知らせようとしている 伝えたいことを読み取ることが看護に直結する 表情などから状態を意識すること	読み取る(5)		
マイナスのイメージをもつ言葉に頑張ろうという思いがあった 表情から感じること 視線、表情、しぐさ、姿勢などからも感じとる 相手の表情やしぐさを感じとる 表情を見て感じること 心で感じたこと	感じとる(6)		
表情から伝わる 表情で伝わる	表情で伝わる(2)		
信頼しあっていくために最低限必要な能力 私を知ってもらおう、相手を知ろうという気持ち 自分も相手も心地よいこと お互いを尊重しあう	お互いに(4)		相互作用である(8)
言葉・表情などが現れ、伝わることもある 患者に自分の表情やしぐさが伝わる 自分の考えていることを伝える	伝わるもの(3)		
気持ちを受け入れ自分の気持ちも主張し、押しつけない 自然に生まれてくる行動	押しつけない(3)		
押しつけない意見聞き、意見を言う			

表2 (つづき)

相手に合わせて変化させるもの 患者の表情によって自分の気持ちも変わる 不思議なパワーが秘められている 共に何かを作り上げることもコミュニケーションである 一人ひとりが異なる価値観をもつことからコミュニケーションの形は様々	変化するもの(5)	
同じ病室の患者ととることも大切 人間と人間のかかわりあい	かかわりあい(2)	
自分の感情や自分自身を表現すること	自分自身を表現する(1)	
信頼関係を築いていける 相互に理解を深めていくことが、信頼関係を築くこと 関心を持って接し、知り、信頼関係を築く 信頼関係が生まれ心を開いてくれる 信頼感を深めるための関わり 自尊心を傷つけると相手との信頼関係は崩れる	信頼関係(6)	信頼関係を築くもの(8)
心を開いてくれるまでには経過があり、段階を踏んでこそ信用が得られる 信頼関係を築くには段階がある	信頼関係の段階(2)	
心の会話としてとらえる 自尊心とどう関わっていくか 気持ちを理解し考える 分かると思う気持ち 聞きたいと思いつながりながら会話をする 知りたいという姿勢や思い 患者の立場に立って一人ひとりの患者を大切に 患者の話聞くこと ありのまま受け入れようと話を集中して聴く 受け入れ興味を持ち、知ろうとすること その人の人となり、人生を知ることが大切	知ろうとする姿勢(1)	理解しようとする姿勢が大切である(3)
単なる意思表示ではなく、相手を知り、思いやりという重要な意味がある 相手に対する思いやり	思いやり(2)	
伝えるということは私の課題 感情移入のしすぎもよくない 患者との距離のとり方をあげたい 理解を深め、言葉の表現方法、言葉の使い方を習得していきたい	自己課題(6)	

表2 (つづき)

話をしなくてはいけないという意識で気遣いができなかった ニーズの不足に気がつき要求される前に動くことができる			
患者の気持ちを考えて接することができるようになった 言葉の持つ意味をマイナスのイメージで捉えているのは自分、患者はそうでないと感じるようになった	自己成長(2)		内省することである(1)
表情から自分のことに気付く 自分自身の判断に気づく 自身を見つめ直すきっかけになる	自分自身に気づく(3)		
患者さんに触れ会話をする タッチングは大切 相手に触れること 患者に触れること		触れる(4)	
一言が加わればそれ以上の会話が成立する 雑談のような会話から始まる 自ら行動し会話を広げることもコミュニケーションである。		会話を広げる(3)	
オープン・クエスチョンを用いた問いかけ 否定をせずなぜそう思うのかを聞くこと		質問の方法(2)	技法である(1)
笑顔で目線を合わせて会話をする 目線を合わすことの大切さ		目線を合わせる(2)	
言った事を聞き取り、繰り返すと、うれしそうな表情を見せた		繰り返す(1)	
主語や述語を明確にし、具体化する工夫 アイコンタクト、体の向き、表情、顔色、身振り手振り、相手のことを考える、態度がある		いろいろな技法(2)	
沈黙もコミュニケーションの方法 言葉だけがコミュニケーションではない：沈黙 無理に話そうとせず沈黙の意味を考える 沈黙はあってもいい。無理に会話を続ける必要はない		沈黙のとらえ方(4)	沈黙の意味を考える(7)
沈黙は会話の整理の時間 沈黙があることにより考えることができる		沈黙の時間の意味(2)	
沈黙は自然現象		沈黙は自然現象である(1)	
そばに誰かが居て安心感がうまれる 気持ちを理解し安心してもらう 真剣に聞くことで、安心感が得られる		安心感を得る(4)	

表2 (つづき)

共感してくれると安心感を得る		好ましい心理状態にする(7)
不安を和らげる言葉が大切 共感することで不安が軽減する	不安を和らげる(2)	
明るく希望の持てる心理状態 にもってきたい	希望がもてる心理状態(1)	
ニードを理解するためのカンファレンス 様々な職種が情報交換し、患者にあった医療が提供できる 仲間とのコミュニケーションも、医療従事者として働くうえで重要	チーム医療での必要性(3)	意図的である(7)
援助すべき点を理解し、目的をもつもの 患者の状態を伝えられるのは看護師であり、治療の面でも関係してくる 目的をもって行わないと意味がない。ただの世間話で終わってしまう	目的がある(3)	
すべての看護技術に含まれている	技術である(1)	
寄り添い共感し耳を傾ける、 どんな気持ちでいるのかという ことを考える できることは寄り添う 家族はただそばに居るだけでいい	そばにいる(3)	寄り添うこと(6)
コミュニケーションをとるには、 距離を縮めていくこと 認識のずれは速回りすること になる 距離感が違うと負担になるような 提案をしてしまう	患者との距離(3)	
耳を傾け共感することはコミュニケーションである 言葉の奥には違う意味が隠れていた かもしれない 共感するために傾聴し、感情を 正確に把握する	共感と傾聴(3)	共感すること(4)
頷くことで理解を示し、共感している ことも伝える	共感を伝える(1)	

学生は「気づくこと」「観察すること」「読み取る」「感じること」など観察することの重要性を【感性に左右される】ことであると、コミュニケーション能力は感性に左右されることを学んでいる。感性が活かされるためには、自己のコミュニケーションについてフィードバックし「知ろうとする姿勢」「思いやる」といった【理解しようとする姿勢が大切である】ことを学んでいる。【感性に左右される】、【理解しようとする姿勢が大切である】ことは、コミュニ

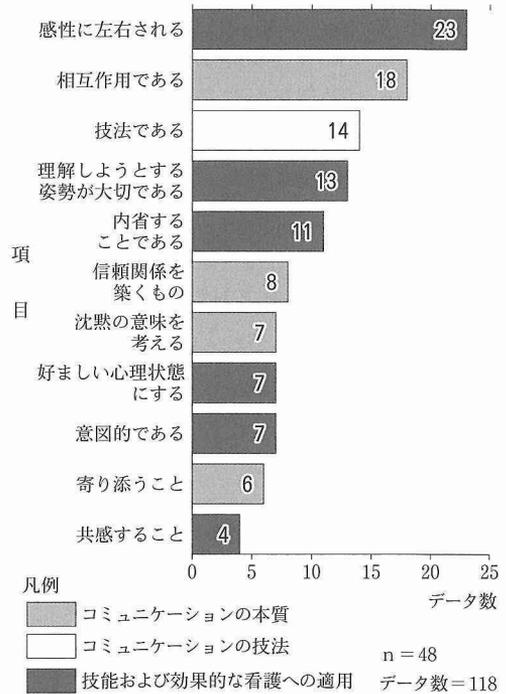


図1 カテゴリー一覧
 ケーションの基盤をなすものであるといえる。コミュニケーションのもつ特性として「伝わるもの」【押し付けない】など、コミュニケーションは一方通行ではなく【相互作用である】ことを学んでいる。さらに、相互作用は「信頼関係」を築くことにつながり、コミュニケーションの本質である【信頼関係を築くもの】を学んでいる。

学生は、学内の講義では「コミュニケーション論」「看護学概論」を中心に学んでいる段階であるために、〈オープン・クエスチョンを用いた問いかけ〉〈否定をせずなぜそう思うのかを聞くこと〉など【質問の方法】を工夫したり、【触れること】【繰り返すこと】など【技法である】ことを学んでいる。【沈黙はコミュニケーションである】と【沈黙の意味を考える】ことで学びを深めている。非言語的コミュニケーションである【沈黙の意味を考える】【共感すること】【寄り添うこと】の意義と効果について学んでいる。

学生は、コミュニケーションを通して「明る

く希望の持てる心理状態にもっていきたい)〈共感してくれると安心感を得る)など〔安心感を得る)〔希望がもてる心理状態)であるとし、【好ましい心理状態)にすることを学んでいる。コミュニケーションは【好ましい心理状態)になるように【意図的である)ことを学んでいる。

【内省することである)は、【相互作用である)】【信頼関係を築くもの)であるとともに、〈言葉の持つ意味をマイナスのイメージで捉えているのは自分、患者はそうでないと感じるようになった)にあるように学びの深化と内省をしている。

ウィーデンバックの理論を援用すると(表3参照)、基礎看護学実習 I におけるコミュニケーションに対する学生の学びは、『コミュニ

表3 ウィーデンバックのコミュニケーション理論(著者の理論をもとに鈴木が作成)

項目	内容
コミュニケーションの本質(効果的な看護の本質)	刺激、送り手、メッセージ、伝達経路、受け手の相互作用である 信頼関係を確立し、それを維持し続ける自分自身の能力のいかんにかかわっている 自分自身の能力とは、看護師の特別な内在的資質、内部にある方向づけ、感じやすくする力である 患者は、看護師およびその援助を信頼できると確信していなければならない
コミュニケーションの技法	幅広いで出し 質問を投げかけること 言外の意味を言語化すること 相違を明確化すること 不一致を明確化すること 類似点を明確化すること 一般的な誘導を試みること 感じたことや言われた内容を反射的に投げ返すこと 内容を言い換えること 内容を要約すること 誘導的な質問
技能および効果的な看護への適用	意図の明快さ 知識の豊富さ 態度 判断力 感受性

ケーションの本質)である【感性に左右される)】【相互作用である)】【理解しようとする姿勢が大切である)】【内省することである)】【信頼関係を築くもの)】【共感すること)】【寄り添うこと)の7カテゴリー、『コミュニケーションの技法)』である【技法である)】【沈黙の意味をかながえる)の2カテゴリー、『技能および効果的な看護への適用)』である【好ましい心理状態にする)】【意図的である)の2カテゴリーであった。ウィーデンバックの理論に【沈黙の意味を考える)に該当する概念はなかった。

考 察

1. アーネスティン・ウィーデンバックの理論との比較・検証

学生のとらえたコミュニケーションの学びのプロセスを図2に示した。素データを分析すると、学生はウィーデンバックの述べるコミュニケーションの本質、コミュニケーションの技法、技能および効果的な看護への適用を段階的に学んでいる。以下、本項においては学生の「学び」の実態をアーネスティン・ウィーデンバックの理論(以降「理論」)と比較しながら論考する。

学生は、気づき、観察し、読み取り、感じ取るという感性が相手を知ることになり、その人の人となりを知ることができることを学んでいる。これらは【感性に左右される)のものであり、相手を【理解しようとする姿勢が大切である)として、この感性と姿勢が看護への適用となる基盤であることを学んでいる。この基盤があって、【相互作用である)】【信頼関係を築くもの)とプロセスを踏んでいけることを学んでいる。ウィーデンバックは『コミュニケーションの本質』⁴⁾において、以下の内容を述べている。看護の実践とは、患者と看護師を主役とする相互作用であること、看護師はその相互作用に、体験、理念、感情、知識、技能および責任をもちこむのであること、看護師の意図は、患者が自分のニードを

満たすのを援助することであり、患者がこの援助を信頼できると確信することが重要であること、看護師が、自分の意図を達成できるかどうかは、信頼関係を確立し、その能力を維持し続ける自分自身の能力にあることである。

理論と比較すると、看護師が自分の意図を達成するために必要な能力を理論の内容に沿って学んでいるといえる。学生は、コミュニケーションは能力であることを学んでおり、対象との人間関係を考える素地ができていますと考えられる。

次のプロセスで学生は、患者に触れ、会話をすること、オープン・クエスチョンを用いること、否定をせずなぜそう思うのかを聞くことなど、患者のニーズを満たすためにコミュニケーションは【技法である】ことを学んでいる。さらに、技法の活用にかかわらず、【沈黙の意味を考える】【共感すること】【寄り添うこと】が看護の目的に近づくことであることも学んでいる。共感するために傾聴し、感情を正確に把握することが看護の適用につながることを認識し、コミュニケーションの本質を再確認している。ウィーデンバックは『コミュニケーションの技法』⁵⁾において、以下の内容を述べている。言葉の用い方は望んでいる成果を達成する上で重要な役割を果たすこと。看護師は、そのとき自分にとって適切と思われる手段や技法によって、一つ一つの相互作用に関わっていること。そして、11の技法を紹介している。「幅広いで出し」「質問を投げかけること」「言外の意味を言語化すること」「相違を明確化すること」「不一致を明確化すること」「類似点を明確化すること」「一般的な誘導を試みること」「感じたことや言われた内容を反射的に投げ返すこと」「内容を言い換えること」「内容を要約すること」「誘導的な質問」である。

理論と比較すると、抽出されなかった学生の「学び」は、「誘導的な質問」「一般的な誘導を試みること」「不一致を明確化すること」

「類似点を明確化すること」「相違を明確化すること」であった。これらの抽出されなかった「学び」については、当該実習の目的が基本的な対人関係を基盤としており、高度な技法を用いる必要性がなかったこと、あるいは、学習段階として用いることが困難であったことが考えられる。今後教授方略の検討が必要である点である。

当該実習の最終プロセスで学生は、看護におけるコミュニケーションには目的があることを学び、実習を通して自己成長を認識している。自己成長にいたるまでには、患者とのコミュニケーションの場面ごとに自己課題を見出し、【内省することである】ことを繰り返す。当該実習での自己課題を明確にしている。このプロセスが看護観の形成を左右すると考える。ウィーデンバックは『技能および効果的な看護への適用』⁶⁾において、以下の内容を述べている。効果的な看護のためのコミュニケーションにとって必要な技能は、「意図の明快さ」「知識の豊富さ」「態度」「判断力」「感受性」の5つであること。看護師は望んでいる成果を得ようと努力する際に、これらを適用するのであること。さらに先述した『コミュニケーションの技法』は、成果を目指して用いることで看護への適用となるのであって、『コミュニケーションの技法』自体では技能とならないことも述べている。

理論と比較すると、抽出されなかった学びは、「知識の豊富さ」と、適正な感覚を意味する「判断力」であった。当該実習の1年次7月においては、知識量、判断力は未熟な段階であり、「知識の豊富さ」「判断力」を学ぶことは学生には困難であったと考えられる。この点に関して、基礎看護学実習Ⅱではどのように学んでいるのか検証が必要である。

以上、学生の学びのプロセスは段階的なものであり、看護観の形成の基盤となるものである。そしてこの学びのプロセスの概念は、基礎看護学実習Ⅱ、各論実習と段階を踏む過

イメージができること、そのイメージは応用できるが、きわめて個別的なものであることを基礎看護学実習Ⅰ後の学生間のカンファレンスで共有化できる方略を検討してゆきたい。学生は、臨床での極めて個別的な、その時、その場でのリアルな学びがいかにか看護実践能力に影響するのかを認識できることが重要である。学生が、自分の学びや成長を自分自身で確認し、学び続けられる姿勢をもつことは、看護実践能力を高める大切な要素である。

学生の能力の発揮という点では、基礎看護学実習Ⅰの目的が、「人間関係をはかるために、コミュニケーション能力を磨く必要性がわかる」(表1参照)としているため、学生のコミュニケーション能力を発揮する場面がまだまだ少なく、評価の難しい点ではあるが、〈伝えるということは私の課題〉〈患者との距離のとり方をあげたい〉にあるように、基礎看護学実習Ⅱに向けて自己課題の動機付けとなっている。

ま と め

安齋⁹⁾は、学生は、コミュニケーションが看護を実践するのに重要な機能であると認識していることがわかるとし、さらに「話を聴く」「会話だけでなく・非言語」「信頼関係」「タッチング」などコミュニケーションを促進する態度や方法について記述しており、コミュニケーションに「困難」を感じつつも「重要性」を認識し「促進」に向けての手がかりを獲得しつつある状況にあると述べている。このことは、〈表情やしぐさ、声の様子などを注意深く観察すること〉〈相互に理解を深めていくことが信頼関係を築くこと〉〈タッチングは大切〉などにあるように、本研究とも一致する点である。

埜¹⁰⁾は、言葉を正確に聞き取るとは、「てにをは」にいたるまでを正確に聞き取ることであるが、言葉には限界があり、感じていることを言語化することは難しく、その上相手

の気持ちを受け止めることはより難しいとした上で、看護におけるコミュニケーションは「深く聴く」ことであると述べている。〈表情やしぐさ、声の様子などを注意深く観察すること〉〈伝えたいことを読み取ることが看護に直結する〉とあるように、学生は、看護におけるコミュニケーションの重要性を理解し、コミュニケーション能力を高める必要性を考える場面を体験したといえる。さらに埜¹¹⁾は、言葉の限界について、私たちは、言葉を媒体として自分を表現している、自分が感じていることを正確に表現するには言葉は十分な媒体ではありえないとも述べている。だからこそ、看護においては、患者の表情、態度、言葉の調子など感受性を働かせることが必要になるのであり、〈マイナスのイメージをもつ言葉に頑張ろうという思いがあった〉のように、コミュニケーションは五感のみならず、物事の本質をつかむ心の働き、直感ともいえる第六感を働かせ感じる力が必要になることを体験している。看護におけるコミュニケーションは、単に言語化されたものを言葉の通りに聴くことではなく、その人が実感し、伝えたいと思っているもの、語り手の内面を聴くことであることを学んでいる。

見藤¹²⁾は、その人の生き方の表現を聴くことの大切さを、多くの病はその人の生き方の表現であり、その人自身が認識していない生き方、その人が気づきたい方向に向けて欲する方法で援助していくことに他ならないとし、ウィーデンバック¹³⁾はこれを援助への二ードを見極めることと述べている。看護実践は、選択肢の中から最適な解を選択するとか、数字で答えを示すといった行為ではないがゆえに、人間対人間のまさに、その時、その場での相互的コミュニケーションが学生にとって大きな経験と意味をもつのである。

学生は、1年次前期開講科目「コミュニケーション論」において、基礎看護学実習Ⅰの実習前に「患者－看護師のコミュニケーション」

を、実習後は「対応困難な場面でのコミュニケーション」を、それぞれロールプレイで事前・事後学習している。【技法である】では、〈否定をせずなぜそう思うのかを聞くこと〉〈オープン・クエスチョンを用いた問いかけ〉のように、体験を通した必要性を理解し、コミュニケーションが目的を達成するための手段であることを学内の講義内容と統合させている。つまり、学生は、学内で学んだ知識を能力として深化させている、あるいは深化させようとしているといえる。

結 論

学生は、コミュニケーション能力を発揮しななければならない場面に立つことで感性を刺激されて、気づく心、表情をとらえる能力、洞察力などを身に付け、理解しようとする姿勢を持つようとしている。つまり、コミュニケーション能力を高める必要性を学んでいるといえる。初学者である学生は、初めての臨地実習を通し、コミュニケーションの意義・目的その重要性を自分の体験から認識する機会を得たといえる。その学びは極めて個別的なものであり、その時、その場限りの一回性という臨地実習ならではのダイナミクスを学んでいるといえる。この学びは、受け持ち患者との関係性の中でのみ培われていくものである。

基礎看護学領域においては、社会における医療・看護に求められるニーズに対し、学内での演習、臨地実習を通して、これらのニーズに対応できる看護実践能力の育成をねらいとした教授方法、方略を検討している。情報化社会、核家族化などの社会構造の変化から、コミュニケーション能力が低下している学生の能力の向上は、コミュニケーションに関する科目だけで学習効果があるものではない。科目間、教員間の連携は必須である。

研究の限界

本研究は、A学における基礎看護学実習 I

の学びのプロセスのみを検証したものであり、一般化できるものではないこと。

分析の信頼性確保のため、複数の研究者で十分な分析を行ったが、メンバーチェックまでにはいたっていない点。

以上を本研究の限界とする。

最後に、参加・協力していただいた学生の皆様に深謝いたします。

文 献

- 1) 厚生労働省医政局看護課：「看護基礎教育の充実に関する検討報告会報告書」。
2007.
- 2) 里光やよい他：看護におけるコミュニケーション基礎看護学実習レポートの分析。
自治医科大学紀要, 3, 2005.
- 3) アーネスティン・ウィーデンバック, キャロライン・E・フォールズ, 池田明子訳：コミュニケーション～効果的な看護を展開する鍵。日本看護協会出版会, 東京, 2008.
- 4) 前掲 3), pp.22-23.
- 5) 前掲 3), pp.44-55.
- 6) 前掲 3), pp.77-106.
- 7) 田島桂子：看護学教育評価の基礎と実際。
医学書院, 2009.
- 8) 目黒悟, 屋宜譜美子他：教える人としての私を育てる。医学書院, 2009, p.25.
- 9) 安斎美枝子他：2年次基礎看護学臨地実習終了後レポートからみた学習内容の検討。
京都市立看護短期大学紀要, 32, 11-15, 2007.
- 10) 埴まゆみ, 見藤隆子他：からだを聴く～看護の限りない可能性を拓くもの～。日本看護協会出版会, 東京, 2000, pp.79-106.
- 11) 前掲 10), pp.83-85.
- 12) 前掲 10), pp.79-106.
- 13) 前掲 3), p.77.